

結集

みんな集まれ！「結集」とは、集まるという意味です。仏教では



「けつじゅう」と読みます。古代インドの言葉で、

sangiti サンギーティといい、意味は「ともに歌うこと」という意味でした。意味の根源は、約二五〇〇年前にお

釈迦様が活動され、入滅をされた後にあります。

お釈迦様の教えの説き方は対機説法といい、人によって説き方を変えました。病気に応じて薬を変えるのと一緒です。お釈迦様が八〇年の生涯を終えると弟子たちの間で混乱が生まれました。それぞれ説かれた教えが違うからです。そして、お釈迦様の教えを確認しようと弟子たちが集まりました。これを「結集」といいます。それぞれ聞いたことを伝えあい、確認をして、暗唱して言葉で伝えました。

最初の結集は、王舎城の郊外に五〇〇人程の弟子たちが集まったと伝えられています。第一結集といっています。

その後も、度々結集が開かれ、仏の教えを確認し合いました。暗唱によるものが、少しずつ文字

化され、中国に伝わり漢文となり、現在

我々が目にするお経の形になりました。



うーみで
かえんない
仏のみ教え

お釈迦様

こんなところに

仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

下天

織田信長の最後の名場面、焼け落ちる本能寺の中で敦盛を舞う。



「人間五十年 下天の内をくらぶれば 夢幻のごとくなり 一度生をうけ滅せぬ者のあるべきか」

（人の一生はせいぜい五〇年、天界の時間に比べれば夢のようです。この世に生を受け、滅びないものなどないのです。）

織田信長が好んだとされる幸若舞『敦盛』の一説です。この中に「下天」と出てきます。

下天とは、天界なかでも一番下の天のことです。仏教においても天の世界がありますが、キリスト教の天国とは違い、人間よりかはいい世界だけれども、上に行けば後は落ちる苦しみが待っている世界で、まだ迷いの世界です。

下天の一日は人間界の五〇年であり、その下天の長さで寿命は五〇〇年あるとされています。人間の一生は、天人においては、一晚の夢に過ぎないのです。冒頭の幸若舞には続きがあり、

「これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ」

（これをさとりに縁としなければ、なんともったいないことであろうか）

と、実は仏教へ誘う言葉だったのです。

